南小泉遺跡第102・108次発掘調査

1 調査要項

遺　跡　名	南小泉遺跡（01021）
調 査 地 点	仙台市若林区南小泉 4 丁目、古城 3 丁目
調 査 期 間	102 次 令和 6 年7 月3 日～ 18 日
	108 次 令和 7 年2 月20 日～ 3 月7 日
調 査 面 積	約 188.5 ㎡
調 査 原 因	102 次：個人住宅建築、
	107・108 次：分譲住宅建築工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	文化財課調査調整係

第１図　南小泉遺跡位置図

2 遺跡の位置と概要

南小泉遺跡は、仙台市の東部、JR 仙台駅の東南約 3.5 kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北 へ約３kmの場所にあり「、宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地し、標高は７～ 14m であります。本遺跡は昭和 14 年の霞目飛行場拡張工事の際に弥生時代と古墳時代の遺構と遺物が発見されて以来、これまでに令和 6・7 年度まで 100 次を超える本発掘調査が行われ、縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明しています。特に弥生・古墳時代の集落跡として知られ、東北地方南部の古墳時代中期の土師器「南小泉式」の標式遺跡です。

また、遺跡内には古墳時代の遠見塚古墳があり、西部では近世初期に政宗が晩年に築城した若林城跡、北西部では中世の市場や城郭が見つかっている養種園遺跡と接しています。その周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳など古墳も多数所在する地域となっています。

３ 主な発見遺構

令和６・７年度に実施された各調査で発見された主な遺構として、古墳時代及び古代の集落に伴う遺構が検出されました。

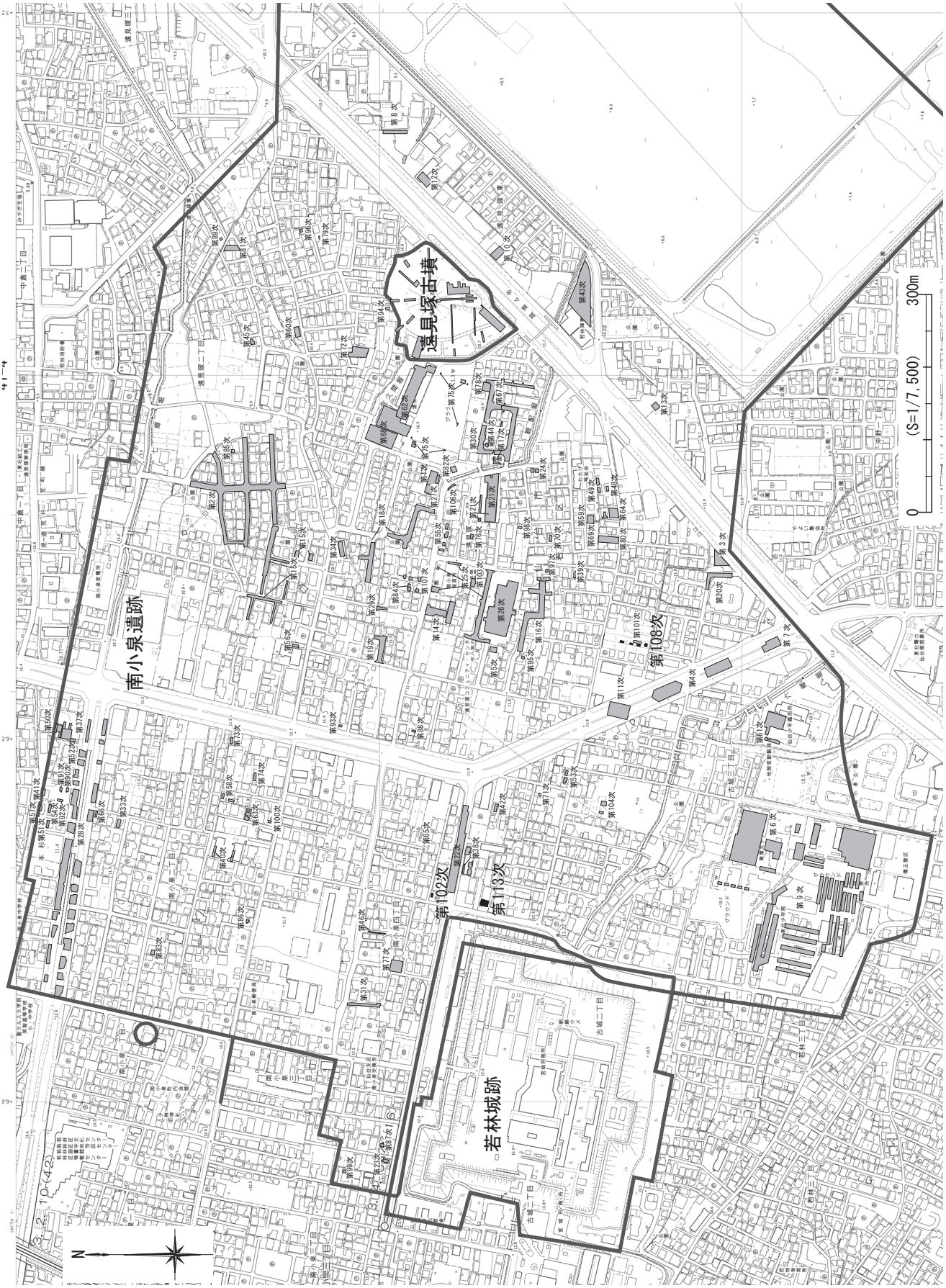
・第 102 次調査

（平安時代）

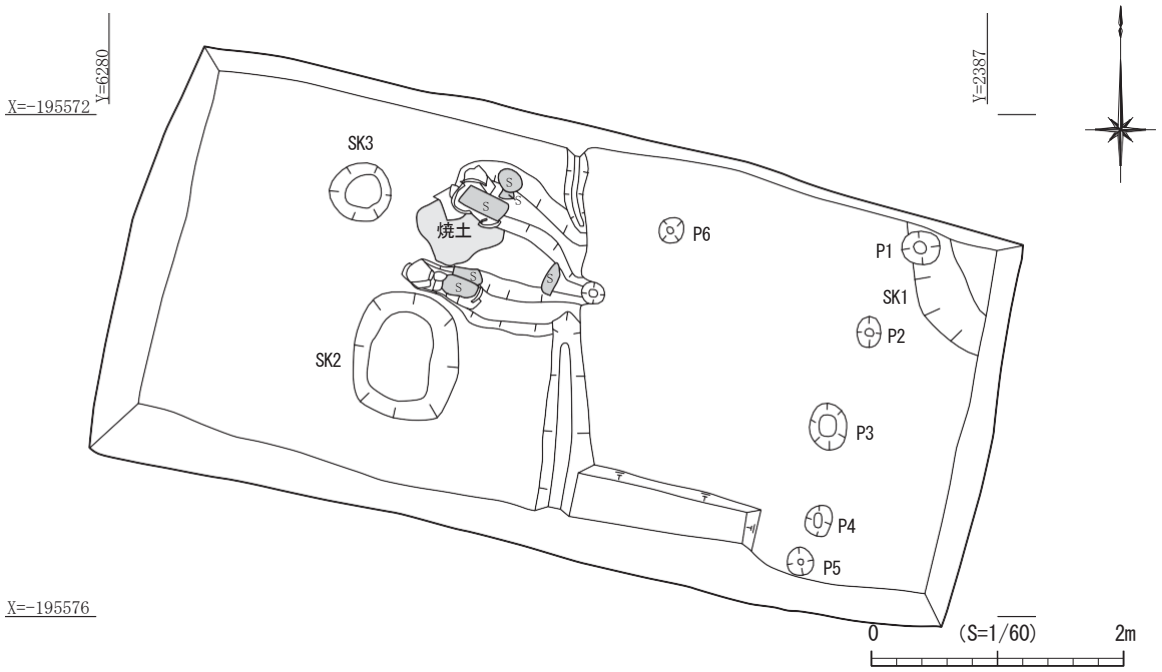
【SI1 竪穴住居跡】

調査区西部で検出された竪穴住居で、平面形は方形が想定され、規模は東西 3.6m 以上、南北 2.9m の竪穴住居です（第 3 図）。建物内部では、カマドと土坑 2 基が検出されカマドに近い SK2 が貯蔵穴と考えられます。カマドは東側に敷設されており、構築材として両袖に石材が使用されています。北袖には凝灰岩製の長方形切石が、南袖には割った玉石が配置されており、これら石材の周囲には大型須恵器甕や土師器甕の破片が多数貼り付けられて、補強材として用いられていた様子がうかがえます。

床面と貯蔵穴から、内面黒色処理を施したロクロ成形の土師器や、同じくロクロ成形による甑が出土しています。遺物の年代から平安時代以降の竪穴住居跡であることが考えられます。



第２図　南小泉遺跡調査区位置図



第３図　南小泉遺跡第 102 次調査平面図

・第 108 次調査の遺構・遺物

（古墳時代）

【SI1 竪穴住居跡】

4 トレンチ北部で検出された竪穴住居で、平面形は方形が想定されます（第 4 図)。規模は東西 3.2m 以上、南北2.2m で、住居内部からは柱跡 1 基が確認されています。検出面からの深さは 30 ～ 40cm 残存していました。 竪穴壁面で南小泉式期と考えられる土師器坏が出土していることから、古墳時代以降の竪穴住居跡であることが考えられます。

【SK1 土器埋設遺構】

4 トレンチ北東部で土器を埋設した土坑が検出されました（第 4 図)。土坑底部はオーバーハング状に掘り込まれており、平面形は不整形を呈します。規模は南北 1.5m、東西 90cm、深さ 40 ～ 50cm です。

出土状況としては、土師器と須恵器が重層的に埋設されており、南小泉式期に属する大型の坏・甕・壺・甑がほぼ完形に近い状態で出土しました。さらに内部からは、須恵器の把手坏碗も検出されています（第 4 図)。この種の須恵器は全国的に出土例が少なく、仙台市内では初期須恵器の特徴を示す大蓮寺窯跡に類例が認められます。

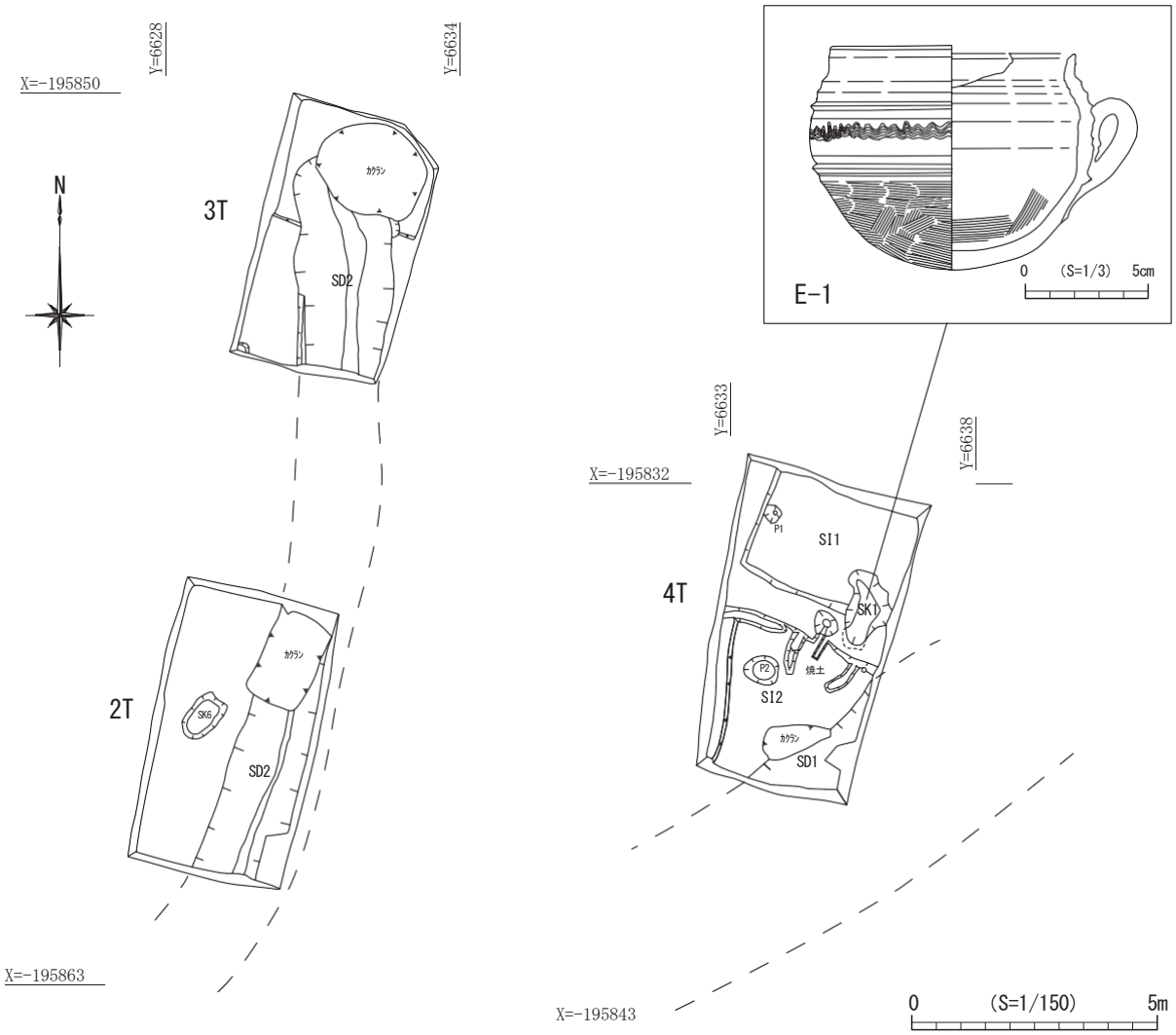
【SD1 溝跡】

2・3 トレンチで東西方向に延びる溝跡が検出されました（第 4 図)。溝の上端幅は 1.8 ～ 2.0m で、確認できた延長は 15m 以上に及び、緩やかにカーブしながら南西方向へさらに続く可能性が想定されます。溝の深さは 70 ～ 75cm で、底部はやや緩い V 字状に掘り込まれていました。また、溝底付近からは南小泉式期の高坏が 5 点出土していることから、古墳時代以降に属するものと考えられます。

(平安時代)

【SI1 竪穴住居跡】

4 トレンチ南部で検出された竪穴住居で、平面形は方形が想定されます（第4 図）。規模は東西3.0m 以上、南北3.2m以上で、住居内部からはカマドと土坑 1 基が確認され、SK2 は貯蔵穴として利用されていた可能性が高いと考えられます。カマドは北東側に設けられていました。カマド付近からはロクロ成形の坏が完形に近い状態で出土したことから、平安時代以降に属するものと推定されます。



登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	法量(cm)			外面	内面	備考
					口径	底径	器高			
E-1	SK1	3	須恵器	把手付碗	9.9	−	9.1	ロクロナデ 櫛書波状文 指ナデ	ロクロナデ ヘラナデ	

第４図 南小泉遺跡第 108 次調査平面図

4 まとめ

● 各調査区からは古墳時代～平安時代にかけては、竪穴住居跡や土器埋設遺構、溝跡などが連続して検出され、南小泉式期の土師器・須恵器を主体とする遺物群から、当該地域における集落の形成と変遷を示す重要な資料が得られました。特に第108次調査区のSK1土器埋設遺構からは須恵器と土師器が一括で出土しましたが、須恵器の時期は5世紀中頃に比定され共伴した土師器も同年代に比定されます。

１．第 102 次調査カマド検出状況（西から）

２．第 108 次調査土器埋設遺構検出状況（北から）